

日本比較文化学会中部支部
令和6年度（2024年度）例会・総会

発表抄録

日時 2025（令和7）年3月30日（日）

会場 椋山女学園大学

* オンライン（Zoom）同時開催

日本比較文化学会中部支部 令和6年度（2024年度）例会・総会の御案内

日時：2025（令和7）年3月30日（日）13:00～16:30（予定）

会場：椋山女学園大学 星が丘キャンパス

愛知県名古屋市千種区星が丘 17-3

会場世話人：樋口謙一郎（日本比較文化学会中部支部長）

***対面とオンラインのハイブリッドといたしますが、オンライン用の機材やネットワークの不調などの事態が生じて中止や中断などはせず、対面（会場）の進行を優先します。**

***オンラインでの参加をご希望の方には3月29日（土）までにZoomリンクをお送りします。オンラインでの聴講をご希望の方は同日16時までに、世話人までメール（higuchi@sugiyama-u.ac.jp）にお申込みください。**

（当日のお申込みの場合、即時に対応できない場合がありますのでご了承ください。）

プログラム

13:00 開場

13:30-13:40 開会の挨拶（中部支部長：樋口謙一郎）

13:45-16:00 自由研究発表 *司会：樋口謙一郎（前半）、二村洋輔（後半）

・長谷川千春（至学館大学）「流動する騎士道：グローバル社会の異文化交錯と新中世主義の変容」

・李江龍（愛知県立大学）「ナマハゲ行事の特徴と変容—秋田県男鹿市真山地区を事例に」

・二村洋輔（至学館大学）「失われた言葉を求めて：柳原銀行記念史料館の映像資料の可能性と課題」

（休憩15分予定）

・澤田敬人（静岡県立大学）「オーストラリア先住民族にとっての『制度化されたリテラシー』と『自分のためのリテラシー』」

・山川智子（文教大学）「『複言語・複文化主義』と医療現象学の交差—対話の可能性を拓く」

・樋口謙一郎（椋山女学園大学）「米軍政期南朝鮮における多様性言説と実相」

16:10- 総会

終了後、閉会

流動する騎士道：グローバル社会の異文化交錯と新中世主義の変容

長谷川千春
(至学館大学)

本発表では、中世以降ヨーロッパを中心に広がった理想道徳である騎士道に着目し、その概念が時代、国境、言語、宗教を超えて異文化と接触・衝突しながら流動的に変容し、多様な表象の装置として機能してきたことを分析する。

まず、騎士道の言語的起源と発展の過程を確認する。騎士道(chivalry)は、中世フランス語の「馬上の戦士」を意味するchevalierに由来し、キリスト教と融合することで騎士叙任の儀式に成文化された。騎士道は多様な要素を包含するがゆえに理想の体現が困難である。その葛藤に苦悩する騎士たちの姿は、15世紀のサー・トマス・マロリー『アーサー王の死』に顕著に描かれている。産業革命を経て帝国拡張が進む19世紀イギリスでは、消滅した職業としての騎士を懐古し、理想化する傾向が強まった。この現象は中世主義(medievalism)とも呼ばれ、騎士道研究において重要な視点を提供する。

さらに、本発表では現代における騎士道の再解釈にも焦点を当てる。中世や近代にも異文化接触は存在したが、現代においては人・物・金の移動が加速し、文化的交錯の機会が格段に増大した。その中で、スポーツ、映画、ゲームといった媒体を通じて騎士道が再構築され、新たな形で中世が再創造されている。この現象は新中世主義(neomedievalism)として理論化され、(反)グローバル化社会における騎士道研究の新たな潮流として無視できない。

以上のように、多角的かつ比較文化的な視点から騎士道を分析することで、多文化社会における混乱や錯綜を伴いつつも、騎士道が文化表象の一つの基盤となり得ることを議論する。

ナマハゲ行事の特徴と変容—秋田県男鹿市真山地区を事例に

李江龍

(愛知県立大学大学院博士後期課程)

ナマハゲは秋田県男鹿市における鬼の姿をしたものである。現在、その習俗は、特に年末年始の行事で知られている。毎年12月31日に行われる「ナマハゲの大晦日」で、地域の青年たちが鬼の面をかぶり、家々を回って「ウォーウォー、悪い子はいねがー」と叫びながら、子供たちを驚かせたり、無病息災を願ったりする。今は秋田県を代表する年中行事である。

昔から冬の囲炉裏に長く暖をとっていると、手足に火斑（ひだこ）ができる。『民俗学辞典』（1951）によると、ナマハゲはその火斑を剥ぎとる鬼と考えられていた。ナマハゲが火斑を剥ぐ対象者は子供や初嫁、初婿である。怠け者を懲らしめたり、注意を促したり、ナマハゲの習俗は懲戒的・教訓的な意味が含まれている。

近世の博物学者である菅江真澄によって著された『牡鹿の嶋風』と『牡鹿乃寒かぜ』での記述が、ナマハゲに関する最初の記録とされている。また、『男鹿寒風山麓農民手記』などで農民の吉田三郎により、ナマハゲは本格的に全国に紹介された。柳田国男は「小正月の訪問者」と名付け、折口信夫は「春来る鬼」と呼び、これまで民俗学者たちはナマハゲに対して様々な考察を行った。

男鹿市真山地区では、1995年に古民家が「男鹿真山伝承館」として転用され、1999年にはその隣に「なまはげ館」が設立された。これらは、地域のナマハゲ行事を再現し、男鹿半島のナマハゲ文化を発信する重要な拠点となっている。しかし、これまでの研究では、真山地区の行事についてほとんど触れられていない。

本研究では、秋田県男鹿市真山地区を事例とし、現地調査を踏まえて、ナマハゲの伝統行事の特徴を解明する。また、菅江真澄や吉田三郎などの文献資料を参照しつつ、ナマハゲ行事の変容について考察する。

失われた言葉を求めて：柳原銀行記念史料館の映像資料の可能性と課題

二村洋輔
(至学館大学)

京都という固有名詞は日本人にとっても、コロナ禍後急速にその存在感を取り戻しつつあるインバウンドツーリストにとっても、特別な意味を持つ。日本人にとって京都は、修学旅行などを通して、一度は訪れたことのある観光地であり、太古の日本の姿を記憶する歴史的情緒豊かな古都である。インバウンドツーリストたちにとってそこは、高い衛生基準を比較的安価に楽しむことができる、エキゾチックな近代的歴史都市である。

そのような観光言説の中で歴史の影に埋没してしまうのは、京都における被差別部落の歴史である。観光ガイドブックなどで大々的に紹介されることはほとんどないが、京都駅以南の崇仁地区にはかつて巨大な被差別部落が広がっており（現在はその面影を街並みにみることがほとんど不可能である）、そこには衛生・住居等劣悪な環境下に人々が暮らしていた。京都を睥睨する京都タワーが南に見ているのは、きらびやかな観光名所からは程遠い「だれも知らない京都」なのである。

そのような歴史を後世に伝える役割を担っているのが、柳原銀行記念史料館である。同史料館は差別のために資金を得られなかった崇仁地区の皮革業者等に融資を行うべく、被差別部落民によって設立された柳原銀行の建造物を改修して設立された資料館であり、同地区の歴史的資料の展示、公開、シンポジウムの企画・運営等を積極的に行なっている。

同資料館は、崇仁地区やそこに暮らしていた被差別部落民の歴史を理解する上で貴重な資料を保持、公開している重要な資料館であるが、そこに保存される資料がこれまでの研究の中で十全に活用されてきたとは言いがたい。特に同資料館に保存されている映像資料については、ほとんどその存在が言及されることはなかったのではないと思われる。本発表では、現在進行中の被差別部落の言葉の研究を推進する上で、柳原銀行記念史料館の映像資料が持つ可能性と課題について、同資料館に所蔵される映像資料の紹介を行いながら考察する。

オーストラリア先住民族にとっての「制度化されたリテラシー」と 「自分のためのリテラシー」

澤田敬人
(静岡県立大学)

オーストラリア先住民族は母語の他にクレオール化した言語を話すことが多い。言語の現象面のみを見てクレオール化というのではなく、クレオール化した言語が彼らのアイデンティティの表現となる。オーストラリアの国是ともいえる多文化主義的な教育では彼らの言語観が尊重されるものの、政府のテスト政策でクレオール化した英語をテストすることができるのかが問題になる。

「制度化されたリテラシー」をオーストラリア連邦政府の教育政策で確認するならば、例えば 2008 年のメルボルン教育宣言 (Melbourne Declaration on Educational Goals for Young Australians) では、「21 世紀の職業に必要とされる社会的インタラクション、教科横断的思考、デジタルメディアの利用、の能力を活かすためにリテラシー、ニューメラシー、教科の知識は重要」「低い社会経済的背景出身の社会的に不利な若い先住民族のために教育成果を向上させる」「ワールドクラスのカリキュラム並びにテスト評価を促進する」とある。国の教育政策がワールドクラスになるために、社会的下層に位置付けられた先住民族が読み書き能力を高めることで奉仕するという目的が読み取れる。このような統一基準を指向する制度化されたリテラシーの元では、先住民族にとって大事なことは何なのかが見過ごしにされやすい。

多文化主義を標榜するオーストラリアでは、「制度化されたリテラシー」からの逸脱ではなく、正当な位置づけを保障された先住民族へのリテラシーについても配慮されている。リテラシーがある状態は、統一基準の英語リテラシーを競うのではなく、教育を計画する段階から、オーストラリア先住民の英語を所与のものとして認め、標準的なオーストラリア英語との対比をしながら、できることは何なのかを確かめる計画を立てている。オーストラリアのニューサウスウェールズ州教育省が行う、アボリジナル英語を話す生徒のための基礎能力の学習ストラテジーを開発している。そこでは一方を標準的オーストラリア英語とする二つの言語の橋渡しを目指し、まずはアボリジナル英語を認めて、独特なボディアランゲージや沈黙の意味、独特な問いかけを学習ストラテジーとして含めている。いわば特注の「自分のためのリテラシー」を教わる。本発表ではその工夫された方法について論じる。

「複言語・複文化主義」と医療現象学の交差 ― 対話の可能性を拓く

山川智子
(文教大学)

超高齢社会において、医療や介護の現場では、異なる文化的・言語的背景を持つ人々が関わるため、価値観の違いが浮き彫りになる。そのため、対話が重要となる。本発表では、対話の鍵となる「複言語・複文化主義」の視点が、医療現象学とどのように交差するかを考察し、より良い対話の可能性を探る。

「複言語・複文化主義」は、単に多言語使用や異文化理解にとどまらず、個々人の内面的な言語観や文化観に着目するものである。この考え方は、医療現象学におけるプロセス（当事者の主観的経験を共有し、都度、最適な対応を見出す）と通じるものがある。人生の最終段階において、自分がどのような治療を受けたいかを考える時、関係者を含めた対話が必要である。その対話で必要なのが、当事者間で意見を出し合いつつ、最も妥当で適切な「納得解」を見つける現象学的な作業である。これは「複言語・複文化主義」に基づいた対話でもある。

「ポートフォリオ」は「複言語・複文化主義」を具現化したものであり、個人の経験や学びを記録し、振り返ることで自己理解を深めるツールである。書くことは単なる情報整理だけではなく、自身の内省と他者との対話を促す役割を果たす。言語学習では、学習者が自らの言語活動を振り返り、成長を確認する目的で用いられているが、この考え方は医療・介護の現場にも応用できる。例えば、患者や家族が治療の経過や希望を記録し、医療者と共有することで、より納得感のある選択を支援する役割を果たす。

「複言語・複文化主義」と医療現象学の交差を示すことで、対話による相互理解が深まり、最終的には自己理解の向上につながる。これにより、医療・介護の現場において当事者が主体的に選択を行うことの意義が再確認されるようになると思う。その結果として、自己理解が深まることで自己肯定感の向上も期待できる。このプロセスは、「複言語・複文化主義」を意識した言語教育とも連環している。「複言語・複文化主義」は、言語学習の現場のみならず、今後は医療・介護の現場においても重要な概念となると考える。

米軍政期南朝鮮における多様性言説と実相

樋口謙一郎
(相山女学園大学)

発表者の主研究である米軍政期南朝鮮の言語政策について、その研究の意義を問われるとき、発表者はまず、鄭大均（2012）の次の記述を想起する。

「急激な社会変動の主役になったのは、朝鮮総督府にかわるアメリカ軍政庁であり、また国内外で抗日運動を指導してきた韓国人リーダーたちであるが、舞台の上には右翼もいれば左翼もあり、日本や中国やアメリカからの帰還者がおり、穏健派や急進派、元親日派や元服役者がおり、時には青年組織やテロリストが登場した。朝鮮史の中で、これだけ雑多な人間が同時に表舞台に登場した例は少ないし、朝鮮語や英語、日本語といった雑多な言語が飛び交った時代という状況も珍しい。」

かような社会状況で、南朝鮮を占領した米軍政が言語の問題にいかに取り組んだかが筆者の基本的な関心事であるが、上述された米軍政期の（言語的）多様性の実相とはどのようなものであったのか。いささか各論的になるが、発表者の知りうるところに基づいて、考察を加えたい。

本発表ではまず、当時の朝鮮語学者・李熙昇（1896-1989）が1946年12月に執筆したという国語の醇化」という論稿に注目し、市中を往来する人々のことばに日本語や英語が混ざっていることを嘆く、李熙昇の批判的認識を考察する。

次に、米軍政期の1947年9月1日、ソウルにつくられた「東洋外国語専門学館」について述べる（韓国で「外国語大学」といえば私立の韓国外国語大学校がよく知られるが、韓国外大の設立は朝鮮戦争後の1954年のことである）。これは「外交官・国際新聞記者養成」を目的に謳った外国語教育機関で、その後、1950年に新興初等大学（現在の慶熙大学校）に吸収されたが、設立当時においては錚々たる教職員が揃い、南朝鮮過渡政府外務部の後援も得られていた。このことの意義を検討したい。